

雪はお嫌い？

こつめ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

好きな人の好きな物を好きになるパターンすき

雪はお嫌い？

目次

1

雪はお嫌い？

雪は嫌いだった。

雪の白さの中に、あの聖女を見てしまうから。

だからカルデアの立地は最悪だ。周囲は全て雪に覆われ、年中いつでも吹雪。景色にあるのは白一色のみ。

全て焼き尽くしたいと思ったのは一度ではない。周りの白が全部無くなってしまえば、窓の外を見る度こんな思いをする事もなくなるのに。

そんなことを考えながら、白に染まる窓の外を眺めていると誰かの足音が近づいて来た。見るまでもなく分かる。私に態々自分から踏み込んでくる愚か者なんて、彼くらいのもんだ。

「こんな夜更けに出歩くなんて感心しませんね、マスター」

「いやあ、なんだか寝れなくて……」

人類最後のマスターにして、人理救済の立役者。それが目の前の愚か者の正体だ。

「ジャンヌこそどうしたの？」

「似たようなものです。お気になさらず」

「そう？それならお言葉に甘えて」

そう言って彼は私が座っていた2人掛けの椅子の隣に腰を下ろした。

「……お気になさらずと言ったはずですが？」

「うん、だから気にせず俺も景色を見てるよ」

「……勝手になさい」

思わず溜息も出る。彼はこういう人間なのだ。勝手にこちらへと踏み込んでくる。それが私のような存在であっても。

しばらく2人で何も言わず、窓の外を眺めていた。外の吹雪の音だけが小さく聞こえていた。

「ジャンヌは、雪って好き？」

「いえ、あまり」

「どうして?」

「……思い出すのよ、雪の白さを見てるとあの聖女サマを」

「……そっか」

会話はそれきりで、また沈黙が降りてきた。

「……アンタは?」

「え?」

「アンタは好きなの?雪」

なんとなく聞いてみたくなって、今度は私が口を開いた。

「うん、好きかな。カルデアに来るまでほとんど雪なんて見なかったから」

「ふーん、そう……」

カルデアに来るまで。魔術師ですらない、一般人だった頃の彼を、私は知らない。普通の日常、などというものは過去の存在しない私からは1番遠いもので、知ったところで何になる訳でもない。けれども。

「雪なんて1年に1回降るかどうかって感じだったからね、俺の住んでたところでは。……って、こんな話どうでもよかったね」

「いえ、もっと聞きたいわ。……アンタがどんな所で、どうやって生きてきたのか」

「大したことない、つまらない話でも?」

「そのつまらない話を聞きたいって言うてるのよ、私は」

何故だかは分からないけれど、私の知らないあなたの事をもっと知りたいと思った。

「……なら、わかった。……何から話そうかな……」

そうして彼の話の話を傾けて、夜は更けていった。

彼の話したことはきつと彼にとってはありふれた、何でもないことだったのだろうけれど。

私にとっては新鮮で、そして何より。

彼の事に少し詳しくなったことが、私を喜ばせたのだった。

「……意外と悪くないかもね、雪も」